

会諸君には、大きな shock であるに違いない。然し、帰
つていくといふ諸君には、斯う自己に不利な報道は
自ら否定し度い心地で一杯であるか故に、一時は
驚いた程でもあったが、いっそのねに此問題を中心
として、やむを得ない場合は、静かである。面白
現象である。

二月十一日(木)

知元節だが、今日は吾々が井のお客の mess hall 参
看に、即ち P である。退院後、S を續き調子良く、
一日中働いたため若干疲労と感ぜ、殊に足つ疲
れは今更にある。疲れ方だ。どうもいとおしい男働
であるだけ、それは軽微な筋肉労働とは云々かつ、
運動と異なり、やっぱり疲労の工合は、運動の程と爽快
は全く何処か病的なると矢は、蓋し久し振りの
経験である。

昨夜から遠く北風に、更に気温低下、寒気著しい
のがあった。石原編る寒風に堪へ難く真夜中をうたう
目を見、ストーヴに火を着け暖を取らざるを得な
かつた。時計を見ると午前一時半。再び床に入
りか眠りて復に起き出たのは四時半。相成夜具
は準備してあるがバウワウの不気全さは、こんな
風には、なかなか減るものだ、殊にベッドが寒いから
上へいそろそそ着るにも鈍目である。春風駭蕩の
陽々たる日を満喫するかと思へば、こんな寒さか

不覚打うつやってくる。妻が土地だ。

午後、初井一劍氏が、同氏の家族が居る

Central Utahに於けるRelocation Center及び今後新設されるInternees family Center等に、一時間の講演を試みた。同氏は戦争が始まる以前、華盛頓一週間の新聞記者としてゐて、収容されて以来帰国を望み、交換船の機会を待つてゐる一人である、福岡県出身。彼の講演中、特に記した、事を摘んでサウス下の村のものである。因に初井氏は夫人の葬儀執りのためのCenterを許可されたのであった。

△ 出発の際、二名のガードが附添ひのであつたが、長官は初井氏に対し、外出のセンターに於ては一切公衆に向けて講演と嚴禁命令、ガードは初井氏の身辺に危険のや、おそれと保護すべき嚴命した。

△ ミネソタ州で発車時刻と待つ間、ガードと共に活動写真とやつと見たり。

△ ガードは二人とも大卒出身者で、廿三と廿五と云ふ自分の子より若い青年で、頗る戦心と先も全情と尊厳を以て、自分と終始に接し紳士に對する禮を失はなかつた。

△ Denver市でも乗換汽車の発車時刻と待つ間、市内は白人街で食料と撮らうと思ひ、兵同伴一白人レストランに立ち寄り、白人居住区域内には日本人は一切立ち寄り買物する事は、其節より嚴禁されて居ると告げられ、駕を他の地域、即ち其処では、ストリート

を軽た向側の - レストランへ行く可く余儀とされた。

△ 旅中、敵口人との故を以て、米人より侮辱を受けたり、或は危険を感ずる程な事はあつた、極く僅か殆んど言ふに足らぬ程度の女からの言動を見たに過ぎない。滑稽な事は或るレストランで、其処の女将らに、何か村井君を見てガードル、彼は捕虜かと尋ねたのに、苦笑もつた。

△ Relocation Centerは、入口にのけVineの垣があるだけで、門側内に入るとの牢務所が設けられてる。入場以降の検閲は極めて厳重で、而かも其の検閲はや兵が銃口を差す向け、銃先を以て、一々物造等の開け方を命じられて驚いた。

△ 門やルは二男が待ち受け、いさおリ奇リ泣きて、
 “お父さんすまおい事としました、お母さんと云々
 さいまして”と涕泣したルは、自分も不覚の涙ル
 暮れた、長男がおおいて尋ねると入院中ん
 と云々、即ち母に二回の輸血を施したので、faint
 した結果、巻のわめ入院したのであって、手続を
 終った、直ル病院へ長男と見舞いと、彼は
 “すいません”と涕泣するのであった。長男は、母
 が切腹して出生したので、自分の今日迄存命
 しているのは、母の大きな犠牲の為であり、自
 分は命を捨てても母を救はねばならんと、日
 頃の信念だけに、今回母の死を特に悲しん
 でる訳だ。

△ 同 Relocation Center において、スペイン族兵士
と同胞代表との会見による説明及び全所 Welfare
Dept より Relocation 長官マイヤーに就いての面会せらる
返電を綜合すると、お設の Internes family Center
に関する事項は左の如きものである。

- ① Internes family Center はテキサス州の西南部
にて、メキシコ国境に近接した Crystal City に
設置され、丘の上 オレンジ及びオレンジ樹林
の間に位置し、約二千名を収容出来る。収容
能力は全インテニ一家族を容れる可から、出来
から、お家族より移動せしむ。
- ② 日系市民は十八歳以下とする、但し本人の希望
により移動は可能なり、学校は計画中に属し、
中学学校を終へ、更に大学に入学希望者は許
可される。
- ③ 一人一人収容所に移動した以上、外部に
就職口を得ても、たとへ市民と異、所外に出る可
はできぬ。但し市民権は失はぬ。
- ④ 家族に對しては、食糧と供給し各自は其の
バックパックにて自由にフックする。二世の財産
は監督下に置かれるが、申請にて引き出すことは
出来る。
- ⑤ 同収容所に移動後は、新しい帰口を要求
すも許可されぬ、戦後まで其処に留
る外は無く、戦後と雖、第四安全と認め

得るに非ざれば解放いかりであらう。(即ち
或れ、一般社会の対日本人感情の緩和と
見ればと意味するものと看らる)。

△ Interneeの家族は物ハ十二世帯あるが、彼
等主婦等との会見、概と得ん。或る知人の
Wifeは"木井さん顔を見てゐますよ"と悲壯
と挨拶も述べた。蓋し彼等は、斯う同胞
からは一種の白眼を以て視られ、常々女と
言葉と交はすやと避けてゐる。寧ろ全情を
き立場に在るのだ。

△ Internees 家族に對には、断然主人と共に新
収容地に同棲すべきである旨を極力懇通
す。今日迄、主人が父が Internee として困難な
境遇に終始し來つた不幸を無視する訳
には行かない、老先き長からぬ両親をいたはよ
うとや孝養あつてこそ、親子だ。不幸な境
遇に在る親の爲めに、学校の一年や二年
を犠牲にするのは子として當然の義務でも
あらう。子の意思の故を以て母か父と
Internee 生活を共にすべく躊躇するは
母が悪い云々とか言ひつゝ。

夜、建口亭にあり、兵か六島会では、ビーヤとワ
インに、Mess hall の残り物を徴発し、一同共に
祝杯を上げ、日露戦に出征兵であらう、杉村万吉
君の発案に従ひ、聖新萬歳と三唱して、心

ばかりの奉祝とあった。近頃いふ愉快な幹杯である。

二月十二日(金)

薩摩琵琶
聴く。

初六時、H AreaのRecreation Hallで薩摩琵琶大会が催されおかけ、出演者は一ヶ月程度の初心者諸君であつて、お市と身者中、松浦、丹原、近海、馬橋等の諸君あり、九名の出演者中四名と共が売れ占めてゐる。皆初人並に大に同意しおちやつてのけたのは嬉しかった。先生は荒野昌平君といふ以前シヤトルでの知人であつたが、彼氏の琵琶演奏のや極めて貧弱なもので、殆んど先生とは半ひ難う、未だ素人の域を脱し難い。それでもInterneeの事と先生に会ふから愉快といへる。

僕に取つて、此処へ移動して以来、先月上旬迄の葬儀に参列のため、J Areaへおかけの以外は、K Areaの外へ足を踏み出したのは、これが初めて。即ち再演とか演奏とかいふ席、終りに聴いて居るお市は、エソラ以来最初である。実は仲途で冷えたせいでもあらう腹具合が悪く退却に就いたが、お市の馬橋巨熊(肇城)が真井お市で我儘に最後まで踏ませ留めた。同エリアの浅場及び中村(お市)両君とも同方向、最初からの意図に就いて、以上の杯を調子で、白田君と一緒に